と思ふ。その意味で、生活訓練の上にも、好個のいゝくぎりづけが出來る。

自重といふと大げさのやうであるが、幼兒には幼兒の自重があり、それが自己訓練の大きな力になることは、おとなの場合と變りはない。たゞ、幼兒の場合、その自重は傍からの認識によつて支へられる。認識せられない自重は、時に不健全なあらはれをしたりする。尤も、その認識は、その自重に對して、質に於ても度に於ても、適正のものでなくてはならぬ。傍からの認識が勝ち過ぎると、おだてになり、無理强ゐになる。二つとも、生活訓練の禁物である。巧みな方法としては、幼兒の自重の一つ下のところに認識を控へて、その殘りの分を幼兒自身のほんとうの自重力に餘して置くのがいゝ。先生が認めて呉れる。自分は實はそれ以上だといふところに、自ら自分を持ち上げてゆく餘地と餘力がある譯である。

自重の教育力は、自分に及ぼしてゆくところにある。それを他に及ぼさせることは、然るべく抑へなければならぬ。つまり、えばりの抑へである。えばりはいつの場合でも原始的なものである。從つて子どもにあり易いことであるが、そういふ子どもらしさは子どもにも許してはならない。そんな癖、つまりそんな、原始的な生活感情を味はひつけると、おとなになつても、子どもらしいえばりをつゞけたがることになるからである。えばりは原始的であると共に、自重の不滿足感からも起るものである。自重心が起る。傍から認識して貰へぬ。自分だけで自重感を滿喫し得ぬ。そこでえばる。つまり、弱い相手を求めて、或は相手を弱いとして、辛うじて、自分の自重感を味はうとするのである。前に高く認識し過ぎてはいけぬといつたが、此の意味では、低く認識するのもよくない。適正のものでなくてはならぬと言つたのは此の加減である。

幼兒の自重心を適正に指導し得る人にして、先づ一人前の生活訓練者といへよう。お正月は保姆さんにとつて、その試金石ともならう。

自由遊戯

上遠文子

一つ御年がふえました。お雜煮を澤山戴いてうれしい〳〵お正月。圓いお顏を益〻圓くして、ゑびす樣のやうに、にこ〳〵して幼稚園へ勇んでやつて來ました。

まだ〳〵どん〳〵寒くなる今日此頃、午前中は殆んど屋內保でせう。云ふまでもなく御部屋は御庭よりも活動區域とでも申しませうか、せまい事は勿論です。併し、幼兒達は別に加減する事もなく、全活動力を發揮して居ります。私達、指導する者は、幼兒の活動力を折りまげぬ樣に、そして充分體力の錬成に力める樣心掛けねばなりません。又前月にも申しあげた樣に、換氣衞生に特に注意せねばならぬ事を重ねて此處に記しませう。

かるた、双六、羽子つき、凧あげ お正月の來るよろこびでし

た是等の遊びも、お正月の來たうれしさでやる氣持は又格別です。

かるたも、よく取れる樣になりました。羽子も澤山つける樣になりました。凧も自分であげられる樣になりましたので興味も出て來てお友達同志で面白く遊べる事でせう。

雪あそび　昨夜から降り始めた雪が今朝は大分積りました。御門の所から可愛らしい足跡が御玄關まで續いてゐます。子供は風の子雪の子です。一通りのしっかりした服裝を整へてお外で雪合戰をしませう。

毛絲で包まれた手に粉雪を山の樣に掬つて喜々としてゐます。年少組では雪で兎を作つたり、紐で雪釣りをしたりして遊びませう。

年長組は大きな〳〵雪だるまを作つてみませう。自分達の體よりも大きな球を一生懸命押して來ると額に汗が滲んで來る程です。

何と云つても雪の日の華は雪合戰でせう。雪の彈丸を澤山あつめて、東西兩軍に分れてその雪の彈をあてあひするのです。顏にぴしやつとあたつたり、足にあたり靴の中に入つたりすると、年少組では泣き出してしまふでせう。年長組はこの位は我慢する事にして顏等にはあてぬ樣約束を始めにしておきます。

投げる事、走る事の終始行はれるこの遊びは全身のよい運動です。冬の寒さ等も何處かへ飛んで行つてしまふでせう。さあ、元氣を出してやつてみませう。

扨もう一度保育案を繰つてみました、年少組、年長組と。しかも、もう既に記したものばかりなので、冬の屋内保育の自由遊びを如何によく處理してゆくべきか、唯々その遊びの名稱によつて方法を考へるのも面白いですが、總合的に自由遊びを考へてみるのもどうかしらと考へてみました。幼兒達は私達の保育案にも目にかけず、お友達同志で自分達の考案なる遊びを、何とも云へず面白く、何とも云へず愉快に遊んでゐます。それは私達大人よりみればつまらぬ、譯の解らぬたわいのない遊びでありませう。例へば、大狼ごつこをしてゐました、大狼の子供、人間の子供にそれ〴〵別れて、大狼が山から人間の子供を食べにくるのです。その大狼は、又人間は、實に〳〵眞劍で、一人〳〵一生懸命にわあ〳〵と遊んでゐます。又、一本の綱を圍んであちらにひつぱつていつたり此方に引つぱつたりして喜々としてゐます。子供の世界は夢想の世界であります。私達の想像のつかぬ所まで樂しい世界が擴がつてゐるのです。その樂しい世界を私達大人が傷つけていやしないでせうか。時々私はかう反省してみます。年少組でも、もう此頃は、お友達同志どん〳〵遊びます。ともすれば先生は手持無沙汰になり、誰かつかまへねばと焦つてしまふ事があります。始めの中、まだ團體生活を充分上手に出來なかつた頃は先生中心だつた自由遊戯もかうして幼兒中心に變ると今度は先生が入れてもらふ立場です。しかし此方は大人、時には斷られるかもしれません。

幼兒の樂しい滿喫した遊びをこわさぬ樣又幼兒の樂しい氣分を損はぬ樣、その遊びに飛込まねばならないでせう。先生が入つて

その形が崩れた。氣分が面白くなくてやめる人も出てくる等とは、その先生は失敗と云へるでせう。むしろ傍觀の方が成功したかもしれません。自己意識を捨て、無我の世界に入りうる時こそ幼兒のよき遊び相手であり友達であるのだと、反省し一考してみました。

遊戯

古澤靜子

一つお年が大きくなつた自覺と喜びのこの時を機會に、お遊戯をする態度、見る態度、聽く態度をつくりませう。或時は一齊に、或る時は男兒女兒別に、或ひは脊丈の順に分れて、他の方のをぢつと見るをもいたしたいと思ひます。

寒い時でありますから、輕い運動のものから次第に複雜なものへ、そして成るべく運動量の多いものを選ぶことにいたしませう。

今月は、新しい年をむかへ、日本の子供であるよろこびを一層感じたこの時、お國のしるしである「日本の旗日の丸の旗」、春場所で男兒の血を湧かせる「お角力」、冬の寒空から落ちてくる「雪」、元氣で可愛い「オサル」の遊戯を取上げてみました。

日本の旗日の丸の旗　日本幼稚園協會發行幼稚園唱歌選集所載

隊形。全生連手して圓形をつくる。

「日本の旗日の丸の旗」

全生連手して圓周上を右に歩く。日の丸の旗が圓形の中心に高く飜へつてゐるものとして、左上を眺めながら歩く。

「高くたてよ高くたてよ」

手を離して圓心を向き、二呼間に一拍手と一ホップを行ひ、それを左右の足交互に四回行ふ。元氣よくホップでとぶ。

「朝日の色を赤くそめて」

再び連手して圓周上を左に歩く。始めと同樣圓心にある日の丸の旗を仰ぎながら。

「明るい空にひら〳〵〳〵と」

「高くたてよ」と同じ動作。

「輝く光日の丸の旗」

兩手を上にぐつと伸ばし、足踏みをしながら左右に動かす。日の丸の旗が朝日をうけて、はた〳〵と飜へつてゐる樣に、胸を張り空を見上げながら、思ひ切り兩手を左右に動かす。

「日本の旗日の丸の旗」

「日本の旗」で、拍手をしながら圓心に進み、

「日の丸の旗」の時に、同樣拍手をしながら後退する。

「高くたてよ高くたてよ」

二呼間に一回拍手と共にホップをしながら（ホップは左右の足交互に、四回する事になる）各自のまわりを一廻りする。最後の「たてよ」の時に止まつて、兩手を一度下ろして萬歳をする。この遊戯に於ては、日の丸の樣に、特に綺麗な圓形であるよう注意したい。連手して圓形を作る場合、楕圓形になつたり、圓に凸凹が出來て亂れがちであるから、つないだ手を伸ばし、姿勢をよくして、